

(始良町西餅田南宮島字上田山野)

位置と環境

本遺跡は町の中心部から南西約1km、九州縦貫自動車道に隣接した水田に突き出た標高約11mの低丘陵の南に面した舌状台地の先端部にあたる。近くには小瀬戸遺跡が所在する。

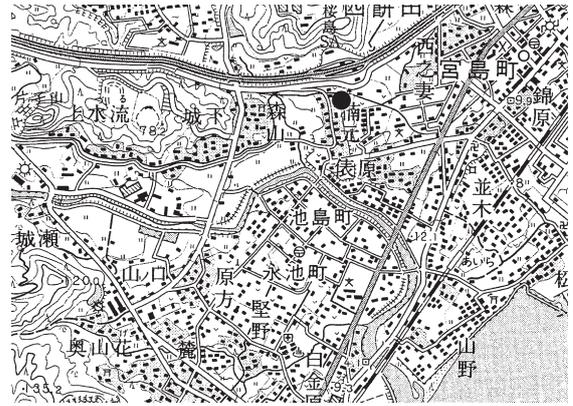
調査の経緯

始良町都市計画南宮島土地区画整理事業に伴う発掘調査は、昭和51(1976)年11月始良町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て調査を実施した。調査面積は380㎡である。

遺構と遺物

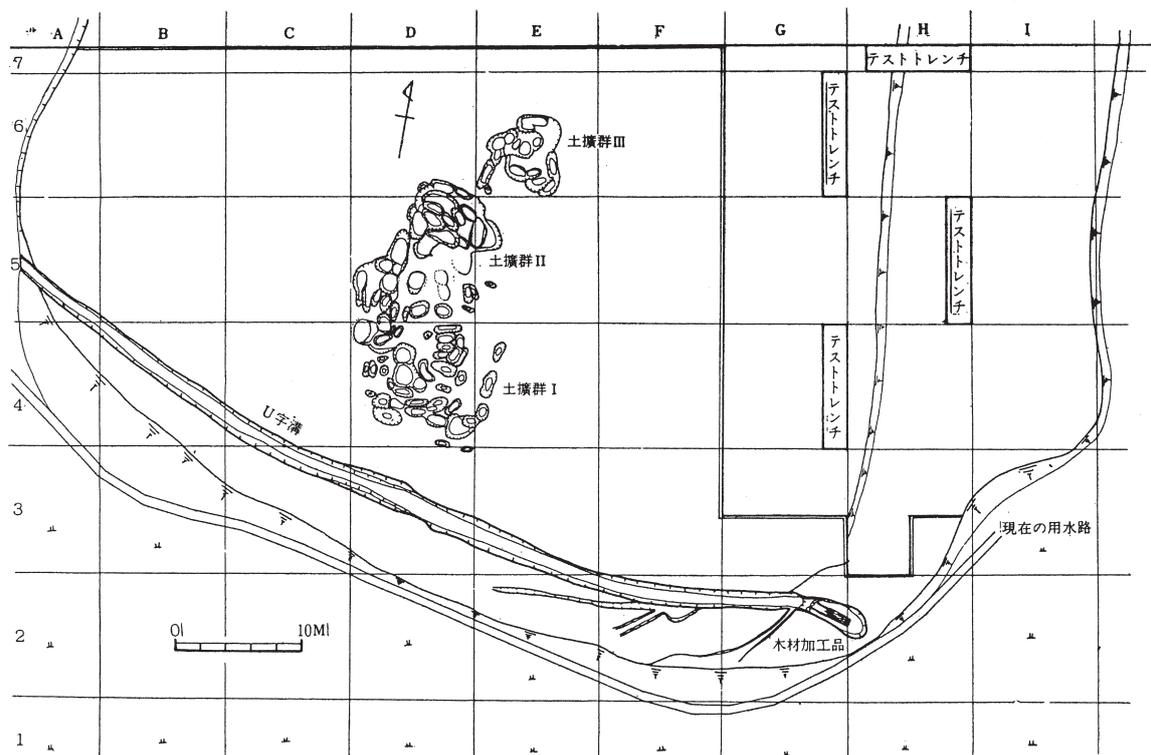
調査の結果、本遺跡は縄文時代前期～後期と中世の複合遺跡である。

縄文時代の遺構については発見されなかった。縄文時代の遺物包含層は第Ⅲ層(灰褐色火山灰層で軽石を含む)であるが、耕作等によって削平されていた。遺物の出土状況から遺跡の本体は整備事業外の北側にあたるものと推定される。



第1図 南宮島遺跡の位置

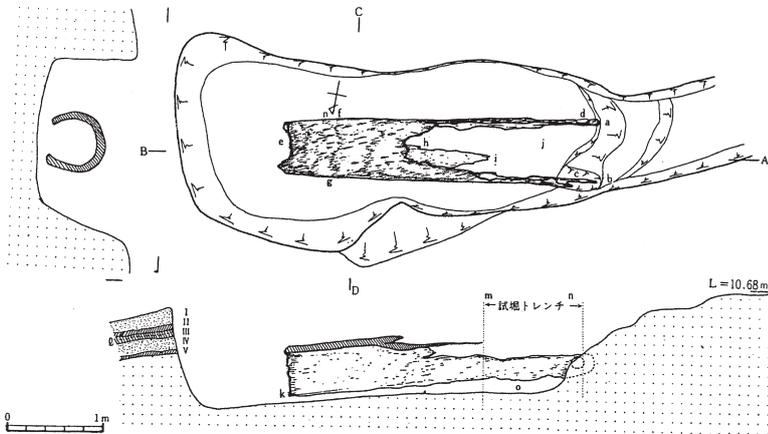
出土遺物は全体的に少なく縄文時代前期末～後期中葉にかけての土器(第3図)が出土した。春日式土器(器形は頸部はしまり、口縁部はキャリパー状に内湾するもの、口縁端部が屈曲するもの、山形口縁を呈すものがある。文様は口縁端部に集中し、連点文、押し引き連点文、ヘラ書き沈線文、キザミ目文、張付け突帯文等を施文する。器面は貝殻復縁による調整、整形を施す)をはじめ、南福寺式土器、市来式土器、岩崎上層式土器、指宿式土器、磨消縄文土器の鐘ヶ崎土器などが出土した。石器(第3



第2図 中世の遺構



第3図 縄文時代中期出土遺物



第4図 中世木材加工品出土状況

図)は石匙(黒曜石),石斧(砂岩),石皿(砂岩),剥片石器(黒曜石,安山岩)が出土した。

中世の遺構には,溝状遺構,土坑が発見された。

溝状遺構は台地縁辺部を西から東に74mに走る逆台形溝(上部の幅180cm,底面幅60cm,深さ80cmを計る。)と,溝の末端には丸太を加工した木材(長さ3.45m,幅60cmの半裁した松材で,中を剥き抜き130cmの天井を残す)が置かれていた。溝の暗渠としての用途が想定される。調査区のほぼ中央に100基におよぶ土坑群が3か所に集中して発見された。第1群に44基,第2群に40基,第3群に16基確認した。いずれも重複し,土坑の形状は楕円形,長楕円

形,円形で,断面は楕円状を呈す。38号・89号・93号・95号土坑内には握り拳大,幼児頭大の軽石がまとまって出土し,また,4号土坑からは瓦器質の羽釜片,5号土坑には青磁片,13号土坑からは須恵器が出土した。土坑の性格は不明である。

特徴

発掘調査面積は狭く,調査成果も乏しいものであったが,縄文前期後葉の春日式土器が比較的まとまって出土したことは注目される。土器の形や文様など今まで不明であったことの補足や器形・文様などのバリエーションの豊富さ等,好資料となった。また,始良町における縄文時代前期～後期土器の遺跡立地や遺跡の在り方など貴重になった。

資料の所在

出土遺物は,始良町教育委員会に保管されている。

参考文献

始良町教育委員会1976「南宮島遺跡」『始良町埋蔵文化財調査報告書』1

(青崎和憲)